

## 『神語りの誕生―折口学の深化をめざす―』

保坂 達雄

一時期の熱に浮かされたような沖縄ブームが去ってしまったのか、近年奄美・沖縄を対象にした口承文芸や民俗学の研究が見当たらなくなって久しい。そんななか久々に刊行された福田晃氏の『神語りの誕生―折口学の深化をめざす―』は、なにやら懐かしさすら感ずるほど南島の伝承世界を真正面から捉えた著書である。

た沖縄が辺境の地域性を越えて世界に繋がってゆくという、発展の証しと見ることもできるかもしれない。

筆者もまた著者と同じく、折口信夫の発生の現場を求めてきた。ただそうしただなかで、研究というものが内包する政治性についても自覚せざるをえなかった（拙稿「研究者としての視線―日本文学二〇〇三年九月）。はたして私たちの研究に収奪はなかっただろうか。沖縄研究を継続的に発展させることが難しかった要因はこんなところにもあったと言えよう。

さて本書であるが、奄美・沖縄の伝承世界を取り上げ、神語りの原初的な発生から説話伝承の成立までを理論的に提示したものである。沖縄の神謡についてはこれまで

多くの研究者の成果があるが、神語りの発生から伝説・昔話までの成立過程を通して、一つの理論として提示したものは本書が初めてともいえ、その意味で本書刊行の意義は大きい。

改めて紹介するまでもなく、著者の福田晃氏は本土復帰前の昭和四十六年から奄美・沖縄の調査に入れられ、爾来フィールドワークは三十余年に及んでいるという。南島説話伝承研究の先駆者であり、今日においてもなお第一人者である。本書はそうした著者の長年にわたる研究の集大成である。本書には、多年に渡るフィールドワークを通しての著者の強い「伝承に対する畏敬と共感」の思いが息づいている。初めに目次を掲げる。

第一編 神語りの誕生―奄美・沖縄の世界―

第一章 神語りの発生―巫覡の成巫過程のなから―

第二章 祭儀のなかの伝承「I」―

韻文体一人称の神語り―

な村落祭祀やまたその祭祀を担ってきた祭祀組織の存続を困難に陥らせてしまった。もはやこれまでのような民俗の採集調査は不可能と言っても過言ではない。それはま

た沖縄が辺境の地域性を越えて世界に繋がってゆくという、発展の証しと見ることもできるかもしれない。

第三章 祭儀のなかの伝承「Ⅱ」——

韻文体一人称の呪詞①——

第四章 祭儀のなかの伝承「Ⅲ」——

韻文体一人称の呪詞②——

第五章 祭儀のなかの伝承「Ⅳ」——

韻文体三人称の神歌——

第六章 祭儀周縁の伝承——散文体三

人称の説話①——

第七章 祭儀外縁の伝承——散文体三

人称の説話②——

第二編 神語りの周縁——奄美・沖縄を

越える——

第一章 宗教伝承の始原

第二章 巫祖祭文の基層——その成立

をめぐって——

第三章 宮古島狩俣・祖神祭（イダス

ウブナー）考

第四章 イタコ祭文「岩木山一代記」

の生成

第五章 神話と祭儀——「みあれ祭」

をめぐって——

本書の中心をなすのは、第一編「神語り

の誕生——奄美・沖縄の世界——」であ

る。これは、平成十七年八月に行われた沖

縄国際大学大学院における集中講義をもと

に書き下ろされたものであり、先に刊行さ

れた『南島説話の研究』（一九九二年）や

『神語り・昔語りの伝承世界』（一九九七年）

と一部重複するところがあるという。各章

のサブタイトルからわかるように、著者は

南島神語りの世界をまず巫現の成巫過程の

なかの神懸かりから発生すると捉え、やが

て祭儀のなかで巫者の一人称の呪詞や神語

として唱誦されるとする。それがまた後に

三人称の神話となり、最後に祭儀の場を離

れて三人称の伝説や昔話として語られたと

する。これが著者の発生論における展開の

道筋である。著者は、神懸かりの段階での

三人称から一人称の呪詞へ、そこからまた

三人称への説話へと転換してゆくという人

称の問題と、祭儀から祭儀の周縁・外縁へ

変容してゆく伝承の場の問題の二つを視点

にして分析を進めてゆく。

第一章では、宮古のユタ（カンカカリ

ヤー）、沖縄本島のノロの聞き書きを事例

にして、「巫者が巫病に襲われ、その神ダー

リーのなかで発する神口」は、「少なくとも

も最初は、無意識的に発するもの」であ

り、神との問答体のなかで現れた「一人称

式」の「神の独り言」だと指摘する。但し、

この神口は巫者自身がのちに説明したもの

で、「神ダーリーの無意識状態における神

口」そのものではないともいう。やがてそ

うした「神ダーリーのなかで発する神語り」

が「巫者が半ば自覚した叙述内容」となり、

「韻文体の一人称式の叙事詩」となってい

く。第二章では、宮古のカンカカリヤーの

巫儀の語りが、初め神降ろしの二人称から

次第に一人称による左右対称の韻文体に変

化する様を紹介する。また奄美のマブイワ

アシや沖縄のマブイグミを例に、ユタによ

る先祖霊との交感が同じように一人称発想

の語りの表現を生み出してゆく過程を詳述

する。

第三章は、奄美のユタによる「思松金」

「島建シンゴ」、また宮古・狩俣のツカサタ

ちが祖神祭のなかで謡う「祓い声のタービ」

「舟んだき司のタービ」など長文の詞章を

そのまま提示して一人称の呪詞を紹介する。第四章では、沖永良部島和泊で死者の初七日や三、四年後の洗骨の際にユタが唱える「世之主」、また狩俣の祖神祭でフサの主が語る「真津真良のフサ」「ミヤームギのフサ」などを取り上げ、ユタやツカサが語る先祖の叙事詩について考察する。第五章は神々の創成叙事詩についての考察である。沖繩本島大宜味村のシバサシや座間

味村の稲の穂祭、また旧真和志村識名の種子取り・種子降ろしの祭祀で語られるアマウエーダー、伊是名村勢理客のティルクグチ、石垣島川平の節祭のマユンガナシのカンフチ、竹富島種子取祭りのカンフツ、宮古島狩俣の祖神のニイーリなど稲作りの起原神話を集中的に取り上げ、創世神話化する過程を追っている。

ここまで紹介してきたように、神々の事蹟を語る神話は祭祀儀礼のなかで伝承されるとき、韻文体の神語りおよび神歌の形態として語られた。ところが祭儀の周縁や外縁では散文体の説話として伝承されるようになる。ここでいう周縁とは「祭儀のきわ

めて近い時間・空間における場合」であり、「伝説的伝承世界」を指すという。また外縁とは「祭儀からよほど離れた日常的な営みにおける場合」とし、「昔話伝承世界」として語られたと規定する。著者によれば、奄美・沖繩の伝説・昔話の世界は信仰の世界から完全に離脱していないゆえに、祭儀の周縁や外縁にあるのだという。

そこで第六章では伝説的伝承世界を分析する。洪水型兄妹始祖神話を主題とする波照間島のアラマリパー（新生婆）の伝説为例に、兄妹始祖を祀る御嶽の祭りの周縁で語り継がれてきたものであろうという。また日光感精型の伊良部島比屋地御嶽の由来譚も、この「御嶽の御願のなかで、これにかかわったユタ（カンカカリヤー）が語り出し」になったものだと指摘する。同じく日光感精卵生型の神話から始まる来間島のヤーマス御願の伝承もまた、「来間島周辺の祭礼由来譚に応じた伝承」だとする。第七章では、兄妹始祖による与論島の始まりや池間島の十二神誕生、さらには宮古島漲水御嶽の由来譚など、バリエーションを

もって語られた昔話を取り上げて、祭儀の外縁で語られてゆく様相を紹介する。

ここまで第一編の内容を見てきたが、著者は本書のサブタイトルに「折口学の深化をめざす」と掲げているところからも明らかのように、「序」で折口信夫の「国文学の発生」に導かれながら立論したと述べている。「一人称式に発想する叙事詩は、神の独り言である」とする折口の発生論を、

「誕生から展開に及ぶ伝承を動態的に」明らかにしようと試み、多年にわたるフィールド資料に基づきながら論証しようとしたのが、著者の南島研究であったといえる。その成果として奄美・沖繩での豊富な調査経験のなかでの巫者に対する貴重な聞き書き、また祭儀の折に唱誦される詞章などが本書では省略されることなく紹介されている。ここには著者の沖繩というフィールドに込めた強い思いや資料をもって事実を語ろうとする研究者としての姿勢が伝わってくる。それだけに全文引用された詞章そのものの中に分け入り、詞章の解釈を通して論証されたならば、構成要素の抽出による

詞章の内容把握だけでなく、詞章そのもの  
がもつ意味付けや詞章相互の関係までも理  
解することができたのではないか。そこか  
ら一つ一つの詞章の成立過程を探ることが  
できたのではないかと惜しまれる。南島の  
伝承世界を論理化する際に視点として用い  
た人称転換や唱誦の問題も、文脈上や  
場の違いにとどまらず、詞章そのものとの  
関わりの中で探ることができたならば、よ  
り説得力をもてたのではないかと考えるの  
である。

後半の第二編「神話りの周縁―奄美・  
沖繩を越える―」は、第一編に収めた論  
考と連動して執筆されたものであり、第一  
編を補充するものであるという。先に掲出  
した目次からわかるように、奄美・沖繩の  
伝承世界を越えてシヤーマニズムの始原  
へ、さらには東北のイタコの祭文や賀茂の  
みあれ祭り、韓国のムーダンの祭文や賀茂の  
幅を広げることにより、比較研究の方向性  
を打ち出している。

最初の第一章では奄美や宮古島のユタの  
成巫過程と成巫儀礼を追い、神懸かり時に

おける韻律的なことばや太鼓の響きに応じ  
て示される激しい身体表現がイメージ（幻  
視・幻映）を伴うものであることを論じ、  
シヤーマニズムの始原が文学・音楽・絵  
画・舞踊等、人間の芸術活動の源泉となっ  
ていると指摘する。また第二章では巫祖祭  
文とイニシエーションとの対応関係を、韓  
国ムーダンの「パリ公主」、済州島シンバ

ンの「初公本解」、いざなぎ流太夫の「い  
ざなぎ祭文」、奄美ユタの「思松金」を例  
に説明する。また宮古島・沖繩本島・奄美  
のユタのカミダリーイ時における冥界・異  
界・天界と続く異界遍歴（マジックフライ  
ト）が、巫祖祭文に共通して見出される巫  
祖の苦難遍歴譚となっていると指摘する。

第三章は宮古島狩侯で行われる祖神祭  
（ウヤガン）の第二回イダスウプナー（イ  
ダスカン）に関する論考であるが、前者  
「神語り・昔語りの伝承世界」（一九九七年）  
所収の「宮古・狩侯の祖神祭（イダスウプ  
ナー）」と神歌・神語り」と同文とも見紛う  
記述が随所に見受けられる。筆者はかつて  
イダスカン見学に際して両論文を資料とし

て熟読した深い思い出があるだけに、本書  
収録に当たっては重複部分については修正  
を加えるなり削除するなりする配慮がほし  
かったと思う。この他にも本書には事例や  
記述の重複が目立つ点が気になった。  
最後の第二章では奄美・沖繩から離れ、本  
土の伝承を取り上げる。

第四章では、津軽のイタコが語る「岩木  
山一代記」は説経浄瑠璃「さんせう太夫」  
の影響を受けながらもその影響は江戸時代  
の寛永期以降だとし、原祭文は神の子選返  
型の日光感精説話だと指摘する。そのうえ  
で「児持山縁起」「浅間の本地」などの中  
世神話、韓国のムーダン・シンバンが唱誦  
する本解（ボンプリ）などの梗概と比較し  
あうことにより、アンジュ姫を主人公とす  
る「岩木山一代記」は、岩木山の山の神の  
本地を語る一人称語りの祭文であったと結  
論づける。この論考は、南島伝承世界の研  
究のみならず一方で中世伝承文学研究に大  
きな足跡を残してきた著者でなくてはなし  
えない、比較研究の大きな成果といえる。

最後の第五章は日吉山王祭と山城の賀茂

祭を「みあれ」の視点から考察した論考である。「祖霊信仰から農耕祭祀の性格を保有するに至ったのが、東本宮系統の古代原始祭祀であった」とする景山春樹氏の日吉大社論を踏まえながら、日吉山王祭に見られる男女二神の結婚と若宮誕生の祭儀は、「御生れ祭」の根底に息づいている原始的・民俗的「結び」の觀念に他ならないと論ずる。また賀茂社の「みあれ祭」における走馬のあそびも「古くは水神・雷神の来臨・昇天を模した神事」であり、「別雷神の昇天の意義を隠して営まれていた」とし、賀茂社の縁起は神の子邈迺型日光感精神話に属するものであり、「水神・雷神信仰に応じた丹塗矢神婚譚に生成された」と位置づける。

これまでの紹介から明らかなように、著者は神話の生成をあくまでも祭祀との関わりの中で考察しようと徹底して拘っている。その上で祭祀のなかでの巫女と神との交流こそは、日本の神話説話の原点であるとする。著者の神話生成の立脚点はここにある。これは師と仰ぐ折口信夫から学んだ

ものである。本書には折口信夫の学説に基づく視点が一貫しており、「折口学の深化をめざす」とする著者の情熱が全編にみながっている。その意味でこの章は本書の掉尾を飾るにふさわしい論考となっている。

(二〇〇九年六月、三弥井書店、本体  
九八〇〇円)

(ほさか・たつお／東京都市大学)

## 口承文芸関連図書一覧1

二〇〇八年～二〇〇九年九月を中心に

石井正己著『桃太郎はニートだった！ 日本昔話は人生の大ヒント』二〇〇八年九月／講談社／八〇〇円

望月新三郎著『民話―こだわりの旅』二〇〇八年八月／オリオン出版／自刊

小沢俊夫著『改訂 昔話とは何か』二〇〇九年四月／小澤昔ばなし研究所／一八〇〇円

宮橋裕司著『民話が語る自然科学』二〇〇九年四月／慶応義塾大学出版会／二五〇〇円

海野弘著『伝説の風景を旅して』二〇〇八年四月／グラフィック社／一五二三円

酒井董美著『向かい山猿が三匹とおる―石見の民話・民謡・わらべ歌』二〇〇九年四月／ハーベスト出版／一五〇〇円

立石憲利著『まると吉備路 総社市の民話』二〇〇九年三月／吉備人出版／一〇〇〇円

立石憲利著『まにわの民話』二〇〇九年六月／吉備人出版／一〇〇〇円

柏村祐司編著『栗山の昔話』二〇〇九年八月／随想舎／一八〇〇円

常光徹・黒沢せい子編『鳥海山麓のむかし話』二〇〇九年八月／イズミヤ出版／三〇〇〇円

196 ページに続く